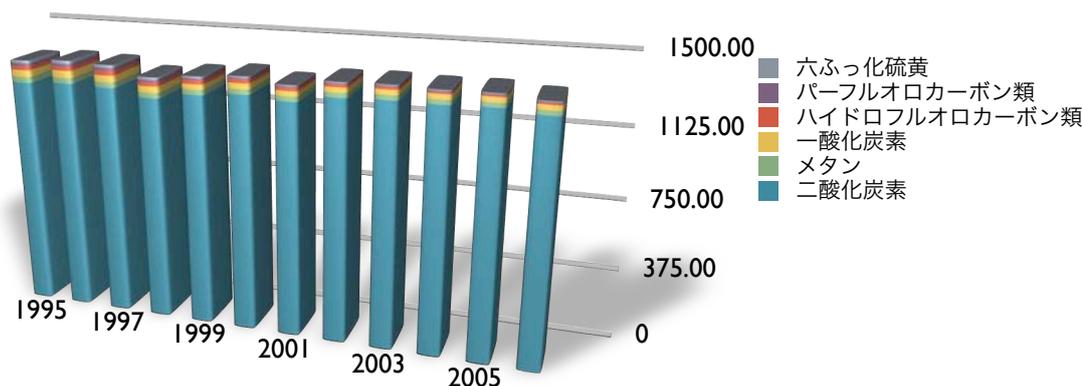


# 国内温室効果ガス排出量（1995-2006）



単位 100万トンCO2換算

年度	計	二酸化炭素	メタン	一酸化炭素	ハイドロフルオロカーボン類	パーフルオロカーボン類	六ふっ化硫黄
1995	1343.90	1228.10	31.00	33.40	20.20	14.30	16.90
1996	1358.20	1241.10	30.30	34.50	19.80	14.90	17.50
1997	1351.90	1236.80	29.20	35.20	19.80	16.10	14.80
1998	1308.50	1200.50	28.30	33.70	19.30	13.20	13.40
1999	1330.20	1235.80	27.70	27.30	19.80	10.50	9.10
2000	1348.30	1256.70	27.00	29.90	18.60	9.30	6.90
2001	1322.70	1240.70	26.20	26.40	15.80	7.80	5.70
2002	1355.50	1278.60	25.20	26.10	13.10	7.10	5.40
2003	1361.00	1286.20	24.70	25.90	12.50	6.80	4.80
2004	1354.70	1284.40	24.40	26.00	8.30	7.00	4.60
2005	1358.10	1290.60	23.90	25.60	7.30	6.50	4.20
2006	1340.10	1273.60	23.60	25.60	6.60	6.30	4.30

総務省統計局 日本統計年鑑 第26章から

## 環境

現在、国際連合（UN）や経済協力開発機構（OECD）等において環境指標の検討が進められているが、OECDが開発した下記の「PSRフレームワーク」は、他の国際機関や各国等が環境指標を開発する際の基礎として広く用いられている。我が国の環境省総合環境政策局が環境に関する幅広いデータを取りまとめ平成14年から刊行している「環境統計集」も主にそれを踏まえたものとなっている。

### 経済協力開発機構（OECD）の「PSRフレームワーク」

OECDでは、環境情報を体系的に整理し、指標化していくための概念的枠組として、「PSRフレームワーク」が開発されている。これは、人間活動と環境の関係を「環境への負荷（pressure）」、「それによる環境の状態（state）」、「これに対する社会的な対策（response）」という一連の流れ（PSR）の中で包括的にとらえようとするものである。また、OECDの環境指標はこのPSRモデルが適用され、「コアセット指標」（図1）が主要ツールとなっている。PSRモデルの各要素は次のとおりとなっている。

(1) 環境への負荷（pressure） 環境への負荷を表す指標は、天然資源を含めた環境への人間の活動による負荷を表す。ここでいう「負荷」とは、直接的負荷（資源利用、汚染物・廃棄物排出等）と同様に潜在的あるいは間接的な負荷（活動そのものや環境の変動傾向等）を網羅している。

(2) 環境の状態（state） 環境の状態の指標は、環境質と天然資源の定性的・定量的側面に影響を与え、環境政策の目的を反映する。さらに環境状況の指標は、環境の全体的な状況と時間の経過に伴う変化を示すよう策定されている。例としては、汚染物の濃度、野生生物及び天然資源の現状等がある。

(3) 社会による対策（response） 社会による対策の指標は、社会が環境面の課題事項に対策する程度を示す。例としては、環境への支出、環境税及び補助金、廃棄物リサイクル率等があげられる。